

機能に学ぶ」という記事を書いた。その中で「腐植化の進んだ堆肥、腐葉土、ピートモスなど、フルポ酸を多く含む資材をもっと上手に活用すべき」と提案し

た。ただ、土を短期間で改良することは簡単ではないし、瞬間的に効果が表れる資材があるわけではない。堆肥にせよ、生堆肥にせよ、それぞれの特性を十分

に理解し、長期的な視点で使いこなすことが必要である。適度な運動を定期的に行い、食生活にも気を配って滋養を取り、その結果とし

て免疫力が高い健康な体となるように、堆肥のバイオステイミュラントとしての効果は、継続的な取り組みの結果として付いてくるだけである。人気のドリンク

を飲んだり、評判のサプリメントを急に取ったりして、一時的に元気になっても、それは見掛け倒しであつて、本当の健康ではないのと同じである。

ペレット堆肥で付加価値 「しみず有機」と「とれたんと」

耕畜連携をブランドに—JA十勝清水町

JA十勝清水町管理部
経営指導課

後藤 聖奈

ごとう せいな

2017年帯広畜産大学大学院畜産学研究科資源環境農学専攻修了。同年JA十勝清水町入り(企画管理部経営指導課)、18年から現職。27歳。江別市出身。



家畜糞尿の活用巡る
課題の解決策として

清水町は十勝地方の西部に位置し、農業は畑作と酪農が混在している。農地面積約1万4000haのうち半分が畑作物、もう半分が

飼料作物の生産に利用され、耕畜のバランスが取れている。耕種部門は畑作4品を中心にプロッコリ、はくさい、アスパラガス、にんにくなどの野菜類を生産。酪農・畜産部門は乳用牛・肉用牛合わせて約4万

頭を飼養し、生乳生産量は十勝一で14万トを超える。このような清水町の農業には、耕畜連携の基盤となる素材が豊富にある。酪農・畜産部門から排出される糞尿を土壌に還元するには、運搬・散布にかか

る労働力の確保、圃場に散布可能な時期の制限、堆肥としての品質など多くの課題がある。JA十勝清水町はこれらを解決する方法の一つとして2009年にJA十勝清水町家畜排泄物堆肥処理施設を設立し、完熟堆肥ペレット「しみず有機」(写真1)の生産を開始。年間約1000トを製造・出荷している。



写真1 完熟堆肥ペレット「しみず有機」。左から500g、6kg、20kg袋。販売店舗はJA十勝清水町生産資材課、食彩館すまいる432の他、DCMホームマック西岡店(札幌市)、旭ヶ丘店(同)、倶知安店で取り扱い中(今後、全道の各地域大型店舗で取り扱いを予定)

有機栽培でも利用可能
JAが散布作業受託も

「しみず有機」は清水町内で発生した乳牛糞と採卵鶏糞、水分調整のための木質チップを混合し、好気条件下で完熟まで腐熟化させた堆肥を直径4〜5cmのペレットにしたものである。木質チップはペレットにする前にふり取り除く。製造工程で化学的な物質は添加しておらず、JA

図1 「しみず有機」に含まれる各成分の可溶性割合

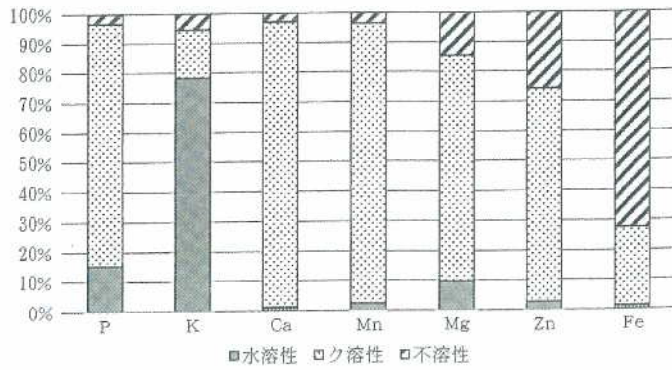


図2 「とれたんと」ロゴマーク

とれたんと

※「とれたんと」と「たんと（たくさんの意）」を組み合わせた十勝清水町農業協同組合の登録商標

表 「しみず有機」の成分表

成分項目	含量	単位
表示成分		
C/N比	10	—
腐植化度	36	—
窒素 (N)	2.2	(%)
リン酸 (P ₂ O ₅)	5.0	(%)
カリウム (K ₂ O)	3.0	(%)
その他成分		
カルシウム (CaO)	16.7	(%)
マグネシウム (MgO)	1.9	(%)
鉄 (Fe)	0.4	(%)
マンガン (Mn)	566	ppm
亜鉛 (Zn)	445	ppm
銅 (Cu)	64	ppm

※含有量は乾物当たり

の作業が競合する時期や堆肥の運搬が困難な圃場、多量に散布したい圃場での利用が多い。
生産当初は、畑作物や野菜を生産する耕種農家を中

心に利用されてきたが、近年は牧草地に利用する酪農家が増えてきている。牧草地に雑草が混入する心配がなく堆肥を施用することができ、利用者の意見では、牛の嗜好性が高くなるようだ。

「しみず有機」の成分表は表の通りである。含まれる窒素成分のほとんどが有機態窒素で、アンモニアなどの不快臭はなく、腐葉土のような臭いがす



写真2 「とれたんと」アスパラ



写真3 「十勝清水にんにく」



写真4 「十勝清水にんにく」を使用した黒にんにく

「しみず有機」を使用していれば化学肥料を使わなくていい、ということではない。「しみず有機」を使って有機物を土壌に還元し、元気な土づくりに取り組み、化学肥料を減らした環境負荷の少ない地域資源の

肥料成分のうちリン酸・カリウム・カルシウム・マンガンは95〜100%、マグネシウム・亜鉛は約80%、鉄は約30%が水溶性もしくは少溶性であることが分かっている（図1）。なお、これらは本誌連載「土の基本に立ち返る」でおなじみの帯広畜産大学・谷教授との共同研究結果によるものだ。

耕畜連携の取り組みを多くの消費者に届ける
「十勝若牛」アスパラまつり、10月上旬に十勝清水にんにく（肉まつり）を開催し、生産者自身も販売に携わっている。また、にんにくは「十勝清水にんにく」として19年10月に産地化宣言し、町全体で生産を後押

この「しみず有機」を使った元気な土で育てた生産物のブランドを「とれたんと」（図2）と名付け、小豆やにんにく、馬鈴しょ、アスパラガスなどの野菜を中心に展開し、主にネット販売で取り扱う。特に力を入れていく品目がアスパラとにんにくだ（写真2、3）。この2つの作物については、取り組みや生産物の認知度向上を図るため、町内でイベント（5月下旬に「十勝若牛」アスパラまつり、10月上旬に十勝清水にんにく（肉まつり）を開催し、生産者自身も販売に携わっている。また、にんにくは「十勝清水にんにく」として19年10月に産地化宣言し、町全体で生産を後押

持続可能な農業を実現するためには、耕畜連携が重要になってくる。その一例が畜種農家から出たバイオマス資源と耕種農家の土づくりをつなぐ「しみず有機」、そしてそれに取り組み農業者と消費者をつなぐブランド事業「とれたんと」である。

さらに、にんにくや小豆など一部の作物は、菓子類などの食品に添加できるようパウダー状にして汎用性を高め、規格外品のにんにくは黒にんにくに加工している（写真4）。こうすることで「とれたんと」を幅広い製品に活用でき、より多くの消費者に耕畜連携の取り組みを届けることができる。